

自宅外通学生における住み方の分析

—女子学生の場合—

小俣 謙二 (名古屋文理短大)

大学の郊外移転などにともない、今後自宅外通学の学生の増加が予想される。このことは自宅通学生の自室空間と同様に自宅外通学生における生活拠点としての下宿・アパート空間の重要性を増大させると思われる。このような考えから、自宅外通学生の住み方と学生生活への適応との関連を調べるため、新入生を対象に、新しい生活空間を快適にするための彼らの住み方を調べることにした。本報告ではそのうち女子学生の結果を報告する。

方法は質問紙調査法を用い、大学・短大の新入生(入学後2-3ヶ月)40名を対象とし、現在の住まいの評価や空間のなわばり空間化などの行動について調べた。

結果の概要は以下の通りである。70%の学生が自ら下宿を希望し、住まいのタイプでは下宿・アパートが50%、マンションが50%であった。この2-3ヶ月での平均帰省回数は1.7回であった。リラックスできる場所として帰省先と現在の住まいを比較した場合、帰省先の方としたのは30%、現在の住まいとしたのは25%であった。転居にあたり何か気に入りのものをもってきたのは67.5%で、縫いぐるみが最も多かった。しかし、自室の自己表出化を行っているのは45%であった。自室の評価では、好きとしたのは72%、自分らしさを表していると評価したのは62.5%であった。現在の住まいのリラックス度と住み方との関係では、好きなものを持参したか否かと住まいへの愛着度が関連していることが示された。